

中国における日本道德教育研究の現状と展望

林子博 (LIN Zibo) *

本報告では、中国における日本道德教育研究のここ十年の動きを整理・紹介する。その上で、報告者自身の研究テーマを手がかりに、今後の研究の展望を示したい。

明治維新以来、近代日本の道德教育は一世紀以上の歴史を歩んできた。その間、戦前の立憲君主制下の「国民道德」から、皇国民の錬成を目的とする戦中の道德教育へ、そして戦後民主主義のもとで再出発した個人の尊厳を重んじる教育まで、様々な路線転換を経験した。その過程は日本の近代国家としての葛藤に満ちているといえる。その葛藤が今なお現在進行形のものであることを物語るのは、戦後の道德教育研究をとりまく絶えない物議である。これは、学問研究の世界に止まらず、政界や教育現場に広がって、戦前・戦争の歴史、戦後の教育改革、いじめ問題や道德教科化など教育政策の動きに対する人々の認識と感情と深く絡むものとなっている。

一方、現代中国では、日本の道德教育に関する研究は1980年代以来次第に蓄積され、数多くの成果を生み出してきた。その中には、例えば文部科学省の『学習指導要領』、または『心のノート』などの道德教材を素材として行われた考察や、日中道德教育の比較研究が挙げられる。だが、それらの研究はいかなる問題意識と社会的背景のもとで生み出されたのだろうか。中国人研究者による議論の焦点と論調にはどのような特徴と限界が見られ、いかにその限界を突破できるのか。本報告では、これらの問題について論じてみたい。

一、中国における日本道德教育研究の現状——2005年以降の研究動向を中心に

(一) 問題意識

中国における日本道德教育研究には一つのモチーフが広く共有されていると思われる。それは一言でいうと、他山の石を以て玉を攻むべしというものである。すなわち、同じく東アジア儒教文化圏に属しながら、他地域に先駆けて近代化を遂げた日本の経験（功罪）を、現在社会転換期を迎えている最中にある中国のための参考にする、というわけである。

例えば、日本の近代化と道德教育との関係について精力的な研究を行ってきた饒従満は、2010年に出版された単著においてこう指摘している。「日本は中国と近い歴史的文化的バックグラウンドを有しつつ、既に近代化の道を歩み終えた国である。このため、中国における道德教育と近代化との関係について深く研究することによって、より完璧に「他山の石を以て玉を攻む」という目的を遂げることができるのではないか」という¹。もちろん、後述するように、ここで言われる「参考」や「他山の石」には、もっぱら手本にするという意味ばかりではなく、反面教師として参考にするという意味も含まれている。そのほかにも、中国の小中学校における道德教育や、大学の思想政治教育のかがみとして、戦後日本の德育にかかわるカリキュラムの設置や教材についての分析を行った論考も多く見られる²。

* 上海交通大学外国語学部、講師、博士（教育学）。

¹ 饒従満『日本現代化進程中の道德教育』（山東人民出版社、2010年）、11頁。

² 例えば、朱伟文「日本学校德育实施方式对我国的启示」、『高等农业教育』2011年第11号；

(二) 主な論調

日本の経験を参考にしようとするモチーフから出発した中国国内の論考には、主に二つの論調が確認できる。その一つは、戦後日本の高度経済成長と安定的社会秩序の背後では、道徳教育が大きな役割を果たしたと見なすものである。たとえば、日本の小学校で使われる徳育教科書について考察を加えた谷峪は、2005年に公表した論文において、次のように述べている。「日本が戦後の短期間で経済大国に発展したのは、いわば日本精神を有する国民の支えのおかげである。(中略) そうした高い素質の国民の形成は、当然質の高い教育、特に道徳教育に負うところが多い。その意味で、日本の道徳教育の様式は、われわれにとって参考に値するものである」³。

もう一つの論調は、日本の道徳教育におけるナショナリズムの伝統と政治化的傾向への批判を特徴とする。日中道徳教育の比較研究を行った王麗榮は、日本の愛国心教育についてこのように指摘している。「日本の愛国心教育は二つの側面を持っている。その一面が民族の振興や富国強兵の思想と関わり、もう一面が強烈的な軍国主義的侵略性の特徴を現している」という⁴。戦後日本の小中学校の道徳教育を研究している曹能秀は、教育勅語と修身科教育への否定から出発した戦後の徳育には政治化傾向が依然として温存されていると批判している。それは、近代以来日本の道徳教育の持つ政治依存性に由来するだけではなく、戦後の勅語批判と修身科批判がただ政治への関心からなされたものに止まり、道徳教育の理論への関心を欠いたことにも関係しているという⁵。

上記の二つの論調を意識しながら、饒從満は日本の近代化過程における道徳教育の功罪について次のような見解を述べている。すなわち、氏は、日本の道徳教育によって培われた集団主義の意識と立身出世主義が近代化（特に経済成長）に多大なサポートを提供したことを評価する一方で、明治以来に形成されてきた道徳教育における政治化傾向とナショナリズムという特徴が、後に軍国主義と超国家主義へと流れたことを批判している。そして、これは「日本の道徳教育における特殊な忠誠観が、博愛・平等・自由など普遍的倫理を凌いだ」ためだと指摘している⁶。饒氏のそうした見解は、この問題に対する現在の中国学術界における通説的理解となっていると思われる。

(三) 考察の限界

もともと、これまでの研究における「政治化傾向」「ナショナリズム」「愛国主義教育」といった概念の内実は必ずしも明確ではなく、場合によってはレッテル貼りをするような傾向さえ帯びている。1930年代以降の道徳教育における軍国主義と超国家主義が明治時代のナショナリズムから発展したものだとするならば、おそらく重要なのは、その発展のプロセスにおいてどのようなオルタナティブが存在したのか、それらのオルタナティブと選択肢がいかなる葛藤を経て後の軍国主義と超国家主義の道徳教育に回収・埋没されたのかとい

ト庆刚、柳海民「日本小学道徳教科書(東京版)《充实的心灵》の静态分析」、『外国教育研究』2012年第11号；李祖超「发达国家高校思想政治教育内容与途径比较分析」、『中国高教研究』2006年第12号；孙淑秋、宋玉忠「日本和韩国公民道德教育的相似性及其启示」、『思想政治教育研究』2010年第3号など。

³ 谷峪「日本小学现行《道徳》教科書述評」、『外国教育研究』2005年第3号、44頁。

⁴ 王麗榮「中日爱国主义教育思想的比较思考」、『比较教育研究』2005年第8号、34頁。

⁵ 曹能秀、王凌：《论战后日本道德教育的工具化倾向》，《云南师范大学学报（哲学社会科学版）》2006年第38卷第3期、第40-41頁。

⁶ 饒從満『日本现代化进程中的道德教育』（山东人民出版社、2010年）、413-415頁。

うことであろう。これらを問うことによって始めて、道德教育におけるナショナリズムの伝統が、固定的なレッテルや所与の結果としてでなく、ダイナミックな思想と再構築可能な過程として認識できるようになろう。そうした作業は、日本という他者の経験をよりよく理解し、さらにこれを中国の参考にするためには不可欠なことだと考える。しかし、管見の限り、中国においては、戦後の道德教育に関する研究が多く蓄積されてきたのに対し、一次資料に基づきつつ、戦前の修身教育にまで遡った実証的研究がいまだに少ないのが現状である。

そうした戦前教育に対する研究関心の低迷は、中国の学术界に限られる現象ではなく、それに類似するような問題は、日本の学术界に関しても近年よく指摘されている。例えば、貝塚茂樹は、「戦後の道德教育研究が、戦前の道德教育を感情的に「断罪」することから出発したために、戦前までの道德教育を学問的に検討する姿勢を決定的に欠落している」と主張している⁷。また、森田尚人も「歴史に眼をふさいだ「安易なイデオロギー論」か、深刻な「思考停止」が、いまなお教育現場と教育学界を広く覆っているのである」と述べている⁸。このように、ナショナリズムや政治化傾向といった概念の有効性を相対化し、戦前教育の歴史現場に戻って、日本近現代の道德教育の原点及びその流動的展開過程を捉え直すことは、日中の学术界にとっての共通した課題といえよう。

二、東アジア道德教育史研究の展望——報告者自身の研究課題を事例に

(一) 論争史の手法による明治道德教育史の再構築

上記の課題に取り組むにあたって、まず意識しなければならないのは、「教育勅語体制」という認識の枠組みである。教育勅語は戦前の国民道德教育の絶対的規範として、国民を戦争に動員し、天皇のための犠牲を国民に強要するための装置として猛威を振るっていた。そのため、戦後になると、戦前の道德教育が一概に「教育勅語体制」という枠組みで括られ、全否定される傾向があった。松下良平が指摘した通り、道德教育の本質を突く「道德とは何か」という問いは、戦前は教育勅語に呑み込まれ、戦後は教育勅語とともに奥宮に封じ込められてしまったのである⁹。また、これへの反動として、教育勅語へのノスタルジアを表明する論もしばしば登場してきた。いずれの立場においても欠けているのは、そもそも近現代の学校における道德教育は実際にどのようなものであり、またどのようなものでありえたのかという問題をめぐる歴史的考察である。

そうした状況に対し、報告者の研究は、歴史学の立場から、教育勅語発布前夜に遡り、森有礼文政期（1885年12月～1889年2月）を中心に、道德教育のあり方をめぐって、森文相側と、福沢諭吉、加藤弘之、西村茂樹ら明治日本を代表する知識人が論争を繰り広げたことに着目して、これらの人物たちによる多様な徳育構想のあいだの論争的關係の解明に努めてきた。具体的には、当時の文部省が中学校・師範学校「倫理」科の最終学年の教科書として刊行した『倫理書』の編纂過程を軸としながら、この教科書への福沢らの見解

⁷ 貝塚茂樹監修『文献資料集成 日本道德教育論争史』（日本図書センター、2015年）に掲載される「刊行のことば」。

⁸ 森田尚人「歴史の中の論争を通して道德教育の本質に迫る」、前掲書『文献資料集成 日本道德教育論争史』に掲載される「推薦のことば」。

⁹ 松下良平「岐路に立つ道德教育—グローバル化がもたらす悲劇と希望—」、『教育と医学』第61号（2003年）。

や、その姉妹編ともいえる『布氏道德学』（森によって「倫理」科初学年のテキストとして選定された翻訳教科書）を分析した。森個人の思想的結晶として『倫理書』を捉えてきた従来の研究に対し、報告者は同書の集团的著作としての性格が持つ重要性を見出し、論争史の手法を用いてその編纂過程における多様な対立軸の存在を明らかにした。とりわけ、『倫理書』の編纂関係者の言論を、当時喧しかった「德育論争」の文脈の中で位置づけながら、『倫理書』と『布氏道德学』のテキストを分析することで、抽象的性格を備える記述内容から、論争的状况に置かれた編纂側の意図や德育理念を読み取ることを試みた。

その結果として、森文政の德育構想は、先行研究の中で指摘されたような反儒教的性格を有しただけでなく、福沢、加藤、西村といったかつて明六社に属した啓蒙知識人たちの構想とも異なる独自性を備えていたことを明らかにした。福沢らは、相互に対立する傾向をはらみながらも、德育の目的は道德的行為を行えるような感情・心を養成することにあると見なす点では共通した。それに対して、森有礼文相が編纂のイニシアティブをとった『倫理書』では、古代ギリシアに淵源する西洋倫理学と心理学に依拠しながら、知性の働きによって感情（忠孝の情を含む）の暴走がもたらすネガティブな行為を抑制すべきと強調したことを実証した。さらに、森が選んだ『布氏道德学』には、愛国心の暴走から出る国益追求にまつわる不正への警告が盛り込まれていたことと、その点が教育勅語制定以後に批判にさらされたという事実を明確化した。本研究は、そうした検討を通じて、戦前の教育には、「教育勅語体制」の枠組みに収まらない德育の可能性があったことを提示した。

（二）国境を越える「修身」と「倫理」——近代中国における日本德育思想の受容と転化

今後の研究では、近代日本と近代中国との間における德育思想の交渉も視野に入りたいと考えている。近年の研究では、蔡元培が著した『中学修身教科書』（1907年）と、井上哲次郎らによる『倫理教科書：新編』（1897年）・『中学修身教科書』（1902年）とのあいだに関連性が認められ、蔡が後者の著述を参考とした可能性が指摘されている¹⁰。それだけではなく、蔡元培は元良勇次郎が著した倫理教科書の中国語版『中等倫理講話』（麦鼎華訳）に推薦の序文を寄せたという¹¹。これらの事実が示唆するように、中国における日本德育思想の受容は、すでに清末期から始まっていた。もっとも、その過程においては、日本が中国にとっての唯一の他者ではなく、西洋倫理学は日中両国がそれぞれ本国の道德教育を構築する上で参考とした座標軸となっていたといえる。その点では、近代中国は、日本を経由して西洋の倫理思想を受容したとも考えられよう。

とすれば、当時の中国と日本が国民の道德教育を構想する上で共有していた課題とは何であったのか。西洋倫理学を用いながら本国の教育課題に対応しようとした両国の知識人はいかなる社会状況に置かれていたのか。そうした状況を踏まえた彼らは、西洋倫理学を受容したときに、それぞれどのような取捨選択を行い、その過程においていかなる交渉があったのか。明治日本の道德教育論争史を足場としながら、近代日中德育思想の交渉史とその意味について考えていく。これが報告者の今後の課題である。

¹⁰ 龚颖「蔡元培与井上哲次郎“本务论”思想比较研究——兼论中国近代义务论形成初期的相关问题」、『中国哲学史』2015年第1号。

¹¹ 同上、124, 115頁。